

# いんたずら

ESSAY

倉元 信行

11

## 進 路

山を教えてくれたのは、ちょうじんである。高校2年の夏休み、ちょうじんは私を山に誘った。

同級生4人で計画したのは阿蘇五岳の縦走である。

まず、独立峰である一番東側の根子岳(ねこだね)を北側から登り、鍋の平(なべのたいら)の方へ抜けるルートをとった。

まだラジウスという便利なものを持っていなかった私たちは薪を背負って急峻な山肌にとり付いた。

根子の頂上から南側に広がる雄大でやさやかな景色は、それまで私が出会ったことのないものだった。

人間の存在が小さなものに思えた。

ふもとに豆粒のように見える建物や車を見ていると、泣き、怒り、小さな事によくよしている自分達人間がひどく小さなものを感じられた。

鍋の平を過ぎ、中岳、高岳への暑い山道を登りきり、やっとその日のテントを設営したのはだいぶ遅い時刻になってからである。

その日はすばらしい流れ星の夜だった。私たちは寝ころがり、次々と流れ行く星に見とれた。

二泊三日のこの旅で、ちょ

うじんは5万分の1の地図の見方と磁石の使い方、それに山の楽しさを教えてくれた。

今でもちょうじんにはこの事を感謝している。

山の写真を撮るのも楽しみの一つとなった。

父も写真が好きで、小さいころ家には二眼レフなど何台かのカメラがあった。

大学時代になると、白黒写真は自分で現像や焼き付けをするようになり、理学部化学教室の暗室をよく利用していた。

大学院の試験の直前に、私の家庭の事情をご存知のM教授に、試験は大丈夫かと念を押された。夏に友達と行った薬師岳から黒部五郎、三俣蓮華と縦走した時の写真を毎

日暗室にこもって焼いていたからだろう。

この縦走では2台のカメラを担いで登り、山々や雪渓などの風景を主に白黒で、イワカガミやギボウシ、チングルマなどの山の花をカラーで撮っていた。

先生には、はいと答えたが、大丈夫ではなかった。

私の成績は9番目であった。合格したのだが、育英会の奨学金は上から6人しかもらえない。

先生に、修士までは行っておいの方がよいと言われ、親には自分で行くからと宣言していた。

それまでの4年間も、授業料だけは親に出してもらったが、あとはアルバイトと奨学金でまかな

ってきた。

私は先生の勧めで、貰うつもりはなかった企業の奨学金に頼ることにした。

教授は、案内の来ていたいくつかの会社名を示された。

「徳山が近くて良からう」

父の一言で私の就職先は決まった。

人間の進路なんて案外単純な事で決まるものだ。

だいたい、4年になる時M教授の物理化学教室を選んだのも、この部屋はみんなでよく飲んでいるという話が気に入ったからだった。

